

彼の真価を推し量るだけの材料を持っていない。ドゥベを倒したのが偶然だったとしても召喚アプリを使える人間は貴重だった。

「月野くん、」

問いかけようとした言葉を飲みこんだ。今私がしなければならぬのは、正確な答えの出ない問題に時間を費やす事ではない。

「今度は何？」

「何でもない。今日はご苦労だった。ゆっくりと休ませよう」

「おやすみなさい」

彼が小さく手を振る様子がやけに印象に残った。私にそういう態度をとる者など、もう他にいないからかもしれない。

部屋を出て執務室へ戻る。まだやらなければならない事は残っていた。すぐに数名の局員が連れだつてやつて来る。

「局長。非戦闘員を含め、所在の取れた全ての局員の携帯端末へ例のアプリのインストールを完了しました。我々の使う旧来の方式では能力不足な者に積極的に使用させる事で戦力の増強が図れるかと。作業班の解析はまだ進んでいませんが、こちらのシステムを破壊するようなバ

グやウイルスは存在しないようです」

「よろしい。では今夜中に菅野の模擬戦闘プログラムを使用して感覚を掴んでおくように」

「しかし、悪魔は一度や二度の模擬戦闘で使いこなせるものでは……」

「使いこなせなければ死ぬだけだ。一般人ですらいきなりの実戦を乗り越えて戦力になっているというのに、それ以下の無能者などこの局面には必要無い」

「……申し訳ありません」

ジブスは《ニカイア》の配布するアプリを入手するのが遅れた。入手後に解析を試みてはいたが、元から召喚術を使えた者以外はまだ一般人に毛が生えた程度でしかなく万全とは言えない。

アレは人が生き延びる為の手段を、これまでのように峰津院を介して与えようとはしなかった……いやまだ《ニカイア》が奴の用意したものとは限らない。

……私人間ですらないアレを信じたいのだろうか。

疑問に答えてくれる者はどこにもいない。ただ知りあったばかりのこの不思議な印象の少年が、身の内の微かな迷いを振り払ってくれるのではという直感めいた予感があつた。